

様式C-7-2

自己評価報告書

平成21年 5月11日現在

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2006～2009

課題番号：18520525

研究課題名（和文）平安貴族における遅刻と時間厳守の研究

研究課題名（英文）A Study about Late Coming and Punctuality in Heian Aristocratic Society

研究代表者

細井 浩志 (HOSOI HIROSHI)
活水女子大学・文学部・教授
研究者番号 30263990

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：時間意識、漏刻、時刻制度、天体観測、宇宙構造論、蓋天説

1. 研究計画の概要

平安貴族の時間観念、特に時間遵守に関する観念を解明することを目的とする。そのため古代の法制文書・儀式書における時間規定、実際の儀式・行事における貴族官人の時間遵守および遅刻に関する様態を調査する。

2. 研究の進捗状況

史料調査の過程で当初計画では予想外の前提条件の部分に、新しい発見があった。すなわち貴族の時間意識、特に時間厳守に関する報時のための計時装置としての漏刻は、日本においては多段式のものが従来は想定されていた。しかし実際に存在が史料上確認できる漏刻は、平安時代末期には比叡山に存在した「十二時漏刻銘」で知られるもので、様態を検討すると水運蓋天儀仕様（蓋天説を模った宇宙構造モデルの水時計）であった。これは中国南朝の梁武帝が作らせたことが確認されているそれとの関係が想定できる。また起源が不明であった日本の時刻制度である一日四十八刻制も、梁武が一時採用した九十六刻制の変形である可能性を指摘できた。また以上のことをから古代・中世初期の日本では宇宙構造論として中国で採用されていた渾天説だけではなく、仏教の須弥山説との類似性から、中国ではその有効性を否定されていた蓋天説が、一定の支持をえていたことも判明した。梁武は仏教篤信者であり仏教は儀式執

行のため報時を重視する。また中国南朝は百濟を介して日本（倭国）と密接な関係にあった。これより平安貴族の時間意識の起源も、中国南朝並びに仏教を考慮すべきことが明らかとなった。あわせて時間の目安となる天体の運行を平安貴族がどのように理解していたのかも判明した。これに付属して北部九州などの海民による天体観測、また北斗七星による計時の様相も指摘した。この結果、一般的な通念—ヨーロッパの自然学・技術が伝来する大航海時代以前の日本人は科学的関心が弱く、宇宙構造に興味がなかった一に反して、中世以前の日本でも宇宙構造論に関する関心が高かったことが明らかとなったのである。

3. 現在までの達成度

③当初計画よりは遅れている。これは史料調査の過程で、計画では所与のものとしていた時間意識の前提条件となる計時装置や時刻制度に関する問題点が多く見つかり、その解明を行ったためである。また法制文書・儀式書における時刻規定の調査はかなり進んでいるが、日記などにおける時刻関係の史料全体は予想以上に量が多いためまだ十分進んでいない。

4. 今後の研究の推進方策

史料調査中に見つかった未解決の時刻制度・計時装置等の問題点の解明を引き続き

進めると同時に、時刻規定の調査を進め、儀式等における時間遵守に関する問題点を明らかにする。

5. 代表的な研究成果
 玄更（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

①細井浩志、中国天文思想導入以前の倭国の天体観に関する覚書－天体信仰と暦

桃山学院大学総合研究所紀要 34-2、45-62 頁、2008、査読無

②細井浩志、日本古代の宇宙構造論と初期陰陽寮技術の起源－特に蓋天説と漏刻をめぐって、東アジア文化環流 1-2、65-86 頁、2008、査読有

〔学会発表〕（計 1 件）

①細井浩志、近世以前の日本における宇宙論的関心－日本人は宇宙構造に無関心だったのか、中日若手研究者交流ワークショップ『伝来する〈知〉、変容する〈知〉－占い－願いと欲望－』、2007、浙江工商大学日本文化研究所

このうち、細井浩志と並んで南國中の吉田義安が間接的な著者である。吉田義安は、吉田義安の著書「吉田義安の占星術」、2007、浙江工商大学日本文化研究所

3. 考古学の実際

株史おじさん。吉田義安は、考古学の実際の調査とその結果を示す。吉田義安は、吉田義安の著書「吉田義安の考古学」、2007、浙江工商大学日本文化研究所

4. 考古学の実際

眞理子の著書「眞理子の考古学」、2007、浙江工商大学日本文化研究所